

## 一隅を照す、医学の輝き

山中太木

地球の上に発生した生物は凡そ水と空気之恩恵の中に抱かれたC、H、O、N、S、P、[X]（ミネラル類）夫々の組合せと各種循環に乗って、酸化―還元、合成―分解、同化―異化、蓄積―消耗、生老病死を繰返しつつ拮抗―共生の間に日月の意義関係を知り、時間の産物として人間が生れ、時間と共に真理を感じ来った歴史は、始めもなく終りもない悠久の中に極微のZYME（変化素）を受け継いで撰択されつつ今日の個々がある。

人類文化の源流は中国では洪水災害に負けず群雄割拠の相剋に鍛えられ、エジプトではアスワンダムから落ち来るナイルの豊かな水に依存し、シュメール文明はチグリス、ユーフラテス流域のメソポタミヤに起ったと云われている。

閑話休題、私は二十数年前に「利根川文化と阿武隈川文化の合流と稽医館学祖系人間像の探訪」を報告した。（人文研究、第一〇号、一一五三頁、一九七九）

それは顕微鏡や細菌学も知らない以前に於て臨床診断、治療を完成しているのは野兎病研究の奥の院詣りとして、本間家数代に亘る禅譲を主にした学祖系の墓碑を探訪し、稽医館碑の拓本を採り、地域古老の懐古談に触れ、俳人芭蕉との密接な交流の確証も得て古文書も蒐めつつ現地の風物にも接し、鹿島神宮と根本寺の寺領争いや、佛頂禪師との月見の大儀寺の関係も発掘して、無住の大儀寺を新たに賑あう百基句碑の俳句寺として復興することも叶えられた。

この二十年間における医学生物科学の進歩は真に刮目に値する。

私が一九五八年、第三回国際アレルギー学会（パリ）医科大学、会長 Prof. B.N. Halpern）に出席講演の後、ウィーン、ベルリンの諸大学を経て、英国バーミンガム大学の Prof. K.A. Bisset を訪ねてアルカリ性糞便菌の電顕写真を見せ核様小体の意義を話し合つて、帰路更にニューヨークに飛んで G. Shwartzman を自宅に訪ねてシュワルツマン反応における生化学的変動を報告して、今度はフロリダに廻つてサザンカレッジのバイオ研究所に留学中の藤沢通明君を訪ねて抗癌作用の研究を見学した後、ロスアンゼルスでシテイ・オブ・ホープに木下良順博士と大野乾博士の実験室で染色体クロモソーム間の無染着部分の意味を免疫学的に解釈すべく苦勞されていたが、後年になって偽遺伝子の考えに到達せられ、近年利根川進博士はエクソンとイントロンの機構を確立され、遺伝子には生命の歴史が刻み込まれていて、個々の長い進化の歴史を含み、進化は遺伝情報の変化の積み上げであり、逆に遺伝子の分析によって医学生物科学史の跡を辿ることが可能になりつつある。

終戦後日本の電子顕微鏡の立遅れを取戻して飛躍的に發展させたのは東昇（京大医、微生物）であるが、京大化研の水渡、小林、植田等の協力と共に長年に亘る困難な研究は知る人ぞ知る涙ぐましい努力であった。

それによつて陰影法、コーチング法、細菌体を切る超薄切片法、PTA陰性染色法、フリーズエッチング法、スキヤニング法、スキヤンニングトンネリング法、X線回析、コンピュータシミュレーションを加えた映像化など電子物理の具體的展開は今日の分子生物学を際限なく推進して、螢光染色をモノクロナール抗体法等と組合せることによつて、超微形態をメカノケミカルシステムの概念から見得ないと云つたカントの“Ding an sich”を直接拡大してマクロのDNA構造として実見し得て、また往年天野重安が心血を注いだ形質細胞の抗体産生機構などは所謂アレルギー渦として鳴戸の渦潮を展望する想いが湧く。

即ち極大のコスモス物理は極微のナノメーターの形像物理と全く相似の把握として納得される。

それにしても嘗つてラングが強調した所の “The little present must not be allowed wholly to elbow the great past out of view.” (Andrew Lang, 1844~1912) 「小ぢな現在は偉大なる過去を無視すべからず」の言は謙虚に受け止めて、現下の変換躍動期に対応してわが医学と医療の新しい創造と調和させつつ確かな信頼を確保することに渾身の努力を推進せねばならない。

幸にも分子生物学遺伝子機構の解明の周り近く神経伝達機構の解明分野が連つていて、神経や脳の分子生物学の進歩も期待され、ガンウィールス問題もプラスמיד、クローニング、ベクター、スプライシング、ハイブリドーマ、細胞融合その他の新技術の活用によって画期的な躍進が起るに違いないが、多くの難病や畸形学の方も感染症の領域に持ち来て分子生物学遺伝学的に夫々発生機構が解明されるれば同時にその予防法も確立されて、社会の明朗化にも役立つ筈である。日頃、関西関東、地区地域を問わず、医史学会や医社会学研究会が他の専門諸分科学会と共に盛況で、殆ど各地で毎日の如く会議や討論が催されていて多士済々に洵に意を強くするものであるが、更に叡智と合議によって無駄を節し、より有効有益に本質的価値を昂揚すべく自由気楽な改新を加えて前進したいと念ずる。

今回京都での第二十三回日本医学会総会を機に私は叡山―琵琶湖―加茂川―淀川水系を中心に医学生物学文化の輝きに就て、一管見を述べつつ直接対面して多くの啓発を受けた恩師、学友の群像に感謝の誠を捧げたい。

そしてその感動を胸に秘めて臆て来るべき新時代への継ぎとしたい。

足立文太郎、井上靖、陳舜臣、林久雄、伊藤恵、塘仁三、舟岡省吾、石川日出鶴丸、荒木寅三郎、戸田正三、久野寧、加藤元一、久保盛徳、松浦有志太郎、松本信一、大矢全節、小笠原登、官崎松記、桜井方策、西占貞、野島泰治、佐谷有吉、谷村忠保、中野操、三木栄、清野謙次、里見三男、木村廉、東昇、天野重安、小林六造、内藤達雄、箕田貢、大原清之助、太田原豊一、常岡良三、目黒庸三郎、尾崎弥之助、有馬頼吉、大縄寿郎、青山敬二、渡辺三郎、木下良順、佐多愛彦、吉津度、今村荒男、堂野前維摩郷、森下薫、吉田貞雄、今西錦司、木原均、大原八郎(リキ夫人、菅一郎)、芳賀竹

四郎、石神亨、古武弥四郎、市原硬、岡川正之、森島庫太、政山龍徳、久保秀雄、奥貫一男、柿下正道、岡本肇、谷友治、谷口腆二、岩倉信珍、釜洞醇太郎、米田正彦、加藤允彦、関悌四郎、菅田栄治、渡辺格、三木行治、阿知波五郎、小川政修、戸田忠雄、登倉登、小野寺直助、後藤七郎、鳥潟隆三、勝呂誉、小沢凱夫、笠原道夫、平井毓太郎、等々約八十数名である。

(大阪医科大学名誉教授)